

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第161号 会 報 1998年6月19日

目 次

第103回総会報告.....	1	IUGG2003準備委員会報告.....	10
第103回総会式次第.....	1	地球惑星科学関連学会連絡会報告.....	11
会長挨拶.....	2	第104回総会並びに講演会開催のお知らせ..	12
田中館賞審査報告.....	2	講演申し込みについて.....	14
長谷川・永田賞報告.....	3	講演申し込み用紙.....	15
第196回運営委員会報告.....	4	予稿原稿フォーマット.....	16
平成9年度決算・平成10年度予算書.....	5	人事公募.....	17
長谷川・永田賞を受賞して.....	8	研究助成・賞案内.....	19
田中館賞を受賞して.....	9	SGEPSS Calendar.....	20

第103回総会報告

東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて行なわれた地球惑星科学関連学会合同大会の第3日目、第103回総会が開催された。中村正人会員の開会の辞に続いて湯元運営委員を議長に選出し、合同大会委員長も務める河野会長の挨拶の後、田中館賞が星野真弘会員(143号)と山崎俊嗣会員(144号)に授与され、審査経過が報告された。受賞論文名はそれぞれ「磁気リコネクションにおけるプラズマ加速」「海底堆積物を用いた地球磁場強度推定の研究」だった。また、長谷川・永田賞が行武毅会員に授与された。14名の新入会員が岩上運営委員により紹介された後、本蔵合同誌編集長より合同誌運営委員会の報告があった。決算案・予算案は三宅運営委員により説明され、原案のまま承認された。この時、定足数233に対し出席数は248(委任状160)だった。この後、笹井運営委員よりシニア制度について説明があり、質疑が行われた。次期総会あたりまでに、財政負担も見積もった上で具体的な提案を運営委員会から行うことになった。次期開催地(水戸

市)・次次期開催地(代々木)の紹介が渡辺運営委員・湯元運営委員よりなされ、最後に河野会長による学会連合の進捗状況の説明があつて総会を終了した。

第103回総会式次第

・開会の辞	中村会員
・議長指名	河野会長
・会長挨拶	河野会長
・田中館賞授与・審査報告	河野会長
・長谷川・永田賞授与	河野会長
・運営委員会報告	岩上運営委員
・合同誌運営委員会報告	本蔵編集委員長
・決算・予算案検討	三宅運営委員
・シニア制度	笹井運営委員
・次期開催地	渡辺運営委員
・次次期開催地	湯元運営委員
・学会連合	河野会長
・閉会の辞	湯元運営委員



第104回総会並びに講演会(本年11月10-13日、水戸市で開催)のお知らせが、12-16ページにあります。

会長挨拶

会長 河野 長

合同大会は今年で第9回になりました。今回は東京大学理学部が開催のお世話を引き受けましたが、組織委員会の中核となったのは、寺沢プログラム委員長、岩上事務局長、中村経理委員長など、いずれも当学会の会員です。東大に他分野の人がいないわけではないのですが、中心になって合同大会を準備したのが本学会会員であったという事実は、当学会が合同大会の発足以来一貫して学会連合事業に熱心に取り組んできた経過をそのまま反映していると思います。昨年秋の総会でも議論されましたように、本学会は今後とも学会連合の推進のために中心的な役割を果たしていきたいと思っておりますので、会員の皆様方の積極的な御支援をお願い申し上げます。

学会連合に関連しては、合同大会以外にも昨年からは今年にかけていくつか重要な動きがありました。その第一はいうまでもなく今年1月からの合同学術誌「Earth, Planets and Space」の発行であり、すでに皆様のお手元にも50巻4号までが届いていると存じます。このA4版2段組に装いを改めた合同誌が、日本を代表する国際誌に育っていくことを心から願っております。そのために、本蔵委員長以下の編集委員会、小野高幸委員らの合同誌運営委員会が学会の枠を越えて大変な努力をされていることに敬意を表するとともに、会員の方々におかれましても、内容の優れた論文を投稿する、査読を依頼された場合に迅速かつ質の高いレビューをする、といったことでこの雑誌の声価を高めるために御助力いただきたいと思っております。

もう一つの学会連合に関する動きは、合同大会前日の5月25日にこのオリンピック記念センターで「地球物理関連学会会長等懇談会」が開催されたことです。学会連合の推進に向けて各学会間で話し合いを持つことの必要性は、すでに昨年からの総会を始めとして運営委員会や評議員会で議論されてきました。今回は日本気象学会の松野理事長及び日本地震学会の石田会長もこの趣旨に賛同されましたので、私を含めて3学会会長から呼びかけという形でこの会議が開催されました。この会議は懇談会ということで各学会間の情報交換が主たる目的で、何かを取り決めるということはいたしませんでした。しかし、IUGGの招致や日本学術会議の研連の再編成といった近未来の重要な問題に対応するためには、財政的基盤をしっかりとった連合組織が必要であるという認識は各学会に共通するようですので、近い

うちにもっと具体的な検討をするための委員会あるいはワーキンググループが発足するものと考えられます。前にも述べましたように、当学会としては今後も連合の具体化へ向けて努力していきたいと考えておりますので、会員の方々の御支援をお願い致します。

さて、最後になりましたが会員の中に最近賞などを受けられた方々がおられますので、御披露したいと思います。田中館賞および長谷川・永田賞については後ほど発表になりますが、これから述べるのは当学会以外から榮譽を受けられた方達です。

西田 篤弘 紫綬褒章

(磁気圏物理学の研究)

上出 洋介 AGU Fellow

(電離圏・磁気圏の電流系とポテンシャルの解析)

平原 聖文 COSPAR Zeldovich メダル

(あけぼの・ジオテイル衛星のプラズマ観測装置開発とデータ解析)

会員の皆様とともにこれらの方々にお祝い申し上げますと思います。

田中館賞審査報告

第143号 受賞者名 星野 真弘 会員
論文名 磁気リコレクションにおける
プラズマ加速・加熱過程の研究

星野真弘会員は、磁気圏物理学や天体プラズマ物理学における中心課題の一つである粒子加速・加熱過程の研究に一貫して取り組んできた。その取り組み方は、単に素過程の理論研究というよりも、深い物理的洞察力をもって観測データを解析して新しい現象を発見し、それを理論的に解明しようという実証的なものである。具体的には、磁気リコネクションや磁気圏ダイナミクス、磁気圏および天体プラズマ中での衝撃波、非線型アルフベン波および電磁流体乱流、パルサー磁気圏などの研究において顕著な業績をあげている。

磁気リコネクション過程はプラズマシートでの高温プラズマの生成・加速・加熱・混合過程で重要な

役割を果たしており、磁気圏ダイナミクスと深く関わっている。サブストームやプラズモイドの発生・伝播などを理解する上でも、リコネクションは非常に重要な物理過程である。星野会員は、数値シミュレーションや衛星データ解析をもとに、マイクロとマクロな物理過程の両側面から精力的な研究を行い、磁気リコネクションに関わる磁気圏ダイナミクスの研究に多大な貢献をしてきた。特に重要な成果はGEOTAIL衛星の観測結果に基づいた磁気リコネクション過程のイオン・ダイナミクスに関するもので、巨視的構造のみならず微視的物理過程を理解する上で重要な速度分布関数の観測に成功し、磁気圏尾部でのプラズモイドの発生・伝播にともなう多種多様な非熱的速度分布関数を導いた。その性質は磁気リコネクションのマイクロな過程と密接に結びついており、従来の電磁流体的なマクロな観点の研究では理解されていなかった。星野会員は粒子シミュレーションを用いた研究を行い運動学的観点のプラズモイドの新しい描像を確立し、観測された様々なイオンの非熱的速度分布関数が磁気リコネクションで統一的に説明できることを示した。最新の観測結果を最大限に利用し、理論研究とうまく融合させた研究として高く評価されている。

以上のように、星野会員の独創的な研究は、磁気圏プラズマシートのダイナミクスに関わる研究をはじめ、幅広い研究活動により本学会の発展にも大きく寄与してきている。このような観点から評議員会は星野会員を今回の田中館賞受賞者に出した。

第144号 受賞者名 山崎 俊嗣 会員
論文名 海底堆積物を用いた
地球磁場強度推定の研究

深海や湖沼につもった堆積物の磁化は、地球磁場の変動の殆んど唯一の連続的な記録である。しかし、火山岩の場合は熱残留磁化の獲得過程が良く理解されているので、磁化から磁場を推定するのが単純な作業であるのに比べて、堆積物の場合は磁化の獲得についても問題があり簡単ではない。これは堆積物の磁化を決定するのが磁場の強度など物理的要因ばかりでなく、統性作用など化学的な過程やbioturbationとかbiomineralizationといった生物の関与するプロセスにも関係しているからである。こうした磁化過程の複雑さは、他方では磁化から磁場ばかりではなく、気候や海洋循環など古環境に関する重要な情報を引出し得ることをも意味している。山崎会員は、堆積物の磁化からいかに信頼性の高い磁場の情報を引き出すか、また更に古環境の変遷をどのように読みとるかの両面においていくつかの国際

的なレベルの業績をあげた。

信頼性の高い磁場情報を得るための研究としては、粘土質堆積物への熱消磁の適用、含水率と磁化の関係調べ、海底下10cm程度という浅い場所で磁化が固定されることを示したこと、岩石磁気的手法を駆使した磁性鉱物の同定や粒子サイズの推定、生物起源のマグネタイトが磁化を担うことの実証などが業績としてあげられる。いずれも困難な実験を慎重に積み重ねて説得力のある結論を導いたものである。

山崎会員はこうした一連の研究によって堆積物の磁化の信頼性を確立した上で、磁化の変動から磁場強度の変化が推定可能であることを示した。これらは太平洋の東西5000kmにわたる場所から得たコアについて非履歴性残留磁化で規格化した磁化の変化が互いに調和的であることから導いたもので、国際的にも信頼性の高いデータとして評価されている。

山崎会員の重要な業績の中には環境磁気学に関するものもあるが、今回の田中館賞の審査では、この磁場強度の復元に関する研究を受賞対象とした。

長谷川・永田賞報告

第22号 受賞者名 行武 毅 会員

行武毅会員は多年にわたり本学会の会員として運営委員・評議委員・会長・GG編集委員などを歴任され、学会の発展に多大の功績を残す共に、地球電磁気学の研究と教育に尽力してこられた。研究の面では、地球磁場の永年変化、地球内部の電気伝導度構造、電磁気学的手法の地震・火山噴火予知への応用など、広い分野で国の内外の主導的役割を果たす大きな成果をあげた。

地球磁場の永年変化に関しては、行武会員は世界中の観測データをもとに地球磁場変動を球面調和解析する手法を一般化して、磁場変動を局所的なものではなくグローバルな現象としてとらえ、地球磁場の非双極子成分の変動が空間的に移動する成分と停滞している成分とに分離することができる事を初めて明らかにした。これは磁場を生成する核内部の流体運動の様子と核-マントル境界の相互作用などを考察するための手掛かりを与えたものである。

また行武会員は、日本列島下の電気伝導度構造を調べる目的で、全国の研究者に呼びかけて地磁気変化・地電位差変化の共同観測を長年にわたって主導してきた。このような共同観測・研究は、従来から

の地磁気3成分の変化に加えて、地磁気・地電流法(MT法)や地電位差の観測が1980年代に導入されて、特に大きな発展をとげた。こうした観測では海の影響をどう評価するかが最大の問題だが、この解決のために、海底磁力計や海底電位差計などのわが国での開発において主導的な役割を果たした。このほかにも国内外の共同研究を数多く遂行して、地球電磁学の研究推進に指導的役割を果たしてきた。特に、伝統のある「電気伝導度異常研究会」のリーダーとして、30年以上にわたって同研究会の

研究活動や若手研究者の育成に尽くしてきた。

更に、地球内部電磁気学の研究成果として得られた知見を、地震予知・火山噴火予知に生かすため、地震予知、火山噴火予知連絡会委員として、防災対策などの分野においても大きな貢献をされた。

以上のように、本学会への多岐にわたる貢献や、地球内部電磁気学の発展に多大な寄与をしてこられた、行武毅会員に本学会は第22号長谷川・永田賞を贈り敬意を表すことにした。

第196回運営委員会報告

日時：1998年5月26日18時半～23時
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
出席：河野会長および全運営委員

能勢 正仁	京都大学
寺田 直樹	京都大学
山本 路子	千葉大学
野田 寛大	東京大学
山崎 敦	東京大学

主な検討事項・結果：

1. 前回議事録検討

原案のまま承認した。

2. シンポジウム共催など承認報告

以下の2件に関する共催などを承認した。

- ・第19回レーザーレーダーシンポジウム共催
- ・1999年環境電磁工学国際シンポジウム協賛

3. 委員会など報告

以下の3件の報告があった。

- ・IUGG準備委員会から札幌開催案紹介
 - ・地球環境関連学会協議会より第1回会合報告
 - ・EPS誌編集委員会より会計・編集状況報告
- また、EPS編集委員として山本達人委員に代わり横山由紀子委員を選出した。

4. 大林奨励賞選考経過報告

2名推薦の報告があった。

5. 新入会員紹介と退会者確認

新入会員

杉山 徹	東京大学
Buonsanto, M.J.	M.I.T.
近藤慎一郎	長崎大学
浦島 智	京都大学
川島 高弘	日本電気
萩島 智子	目白学園
磯田 絵子	通総研
川寫 正壽	
山下 太	京都大学

退会者

柴田 隆	名古屋大学
前里 卓	宇宙技術開発(株)
古賀修一郎	防衛庁
大森 理恵	獨協医科大学
堂面 春雄	
鍋谷 祐夫	弘前大学
Venkateswaran, S.V.	U.C.L.A.
村上 一昭	名古屋外語大学
山本 達人	宇宙科学研究所
田中 亜樹	東北大学

6. 第103回総会次第を検討した。

7. 高橋委員離日に伴い、名簿作成作業の一部は大村委員が引き継ぐこととした。

8. 決算・予算案検討

一部修正後承認(別記参照)

9. 学会連合

25日に行なわれた学会長会議について河野会長より「秋までに各学会の総意をまとめる」と報告があった。

10. ホームページの現状について大村委員より報告があり、パスワード保護された会員専用ページを設けることを検討した。

平成9年度決算・平成10年度予算書

第103回総会において、平成9年度決算・平成10年度予算および学会基金と特別会計（田中館賞、長谷川・永田賞、大林奨励賞）の平成9年度の決算が、次の通り承認されました。平成9年度の決算については、IUGG準備委員会への資金援助、北大開催の秋の講演会・総会への援助増額の、予算にない支出増がありました。学会員の98%を超える高い学会費の納入率により、収入も増え、全体としてはバランスがとれた形となりました。大林先生のご遺族から寄付された30万円が、預かり金として未処理となっておりますが、これを大林奨励賞特別会計へと繰り入れました。

平成10年度予算については、昨年度並みの高い会費納入率を前提としており、会員の皆様の当学会を支えていく気構えに依った予算となっております。IUGG準備委員会への資金援助、秋の学会開催費援助の増額、2年に1度の名簿発行の費用などが支出としてあらたに目につくところです。EPS誌への移行により、学会誌発送事務が出版社へと移り、この支出の減少が、合同誌移行の会計上のメリットとなっております。

（会計担当運営委員）

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成9年度特別会計

平成9年4月1日－平成10年3月31日

<田中館賞>

収入の部		支出の部	
科 目	決算額	科 目	決算額
利子収入	2,210	賞牌代	1,699
前期繰越金	737,400	次期繰越金	737,911
合 計	739,610	合 計	739,610

<大林奨励賞>

収入の部		支出の部	
科 目	決算額	科 目	決算額
募金収入	10,000	賞牌代	14,328
繰入収入	300,000		
前期繰越金	326,026	次期繰越金	621,698
合 計	636,026	合 計	636,026

<長谷川・永田賞>

収入の部		支出の部	
科 目	決算額	科 目	決算額
繰入収入	300,000	賞牌代	24,875
前期繰越金	426,721	次期繰越金	701,846
合 計	726,721	合 計	726,721

<学会基金>

科 目	決算額	備考
当期繰入金	550,000	
前期繰越金	11,579,904	
合 計	12,129,904	

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成9年度本会計決算書

平成9年4月1日—平成10年3月31日

収入の部

科目	9年予算額	9年決算額	差異	備考
会費収入	8,200,000	8,852,424	-652,424	
正会員会費	6,648,000	6,908,200	-260,200	98.4%／全585名
学生会員会費	318,000	491,000	-173,000	88.9%／全92名
海外会員会費	234,000	153,224	80,776	
賛助会員会費	1,000,000	1,300,000	-300,000	100%／18社26口
出版助成金	18,739,000	9,180,000	9,559,000	文部省科学研究費補助金
予稿集売上代	720,000	706,200	13,800	
大会参加費	410,000	418,500	-8,500	
利子収入	100,000	65,046	34,954	
雑収入	100,000	389,241	-289,241	大林先生ご遺族寄付金(300千円含)
小計	28,269,000	19,611,411	8,657,589	
前期繰越金	697,092	697,092	0	
合計	28,966,092	20,308,503	8,657,589	

支出の部

科目	9年予算額	9年決算額	差異	備考
管理費	2,640,000	2,955,155	-315,155	
業務委託費	2,300,000	2,567,286	-267,286	(財)日本学会事務センター事務委託費
通信費	170,000	184,007	-14,007	
印刷費	50,000	155,808	-105,808	
旅費	90,000	850	89,150	
雑費	30,000	47,204	-17,204	
事業費	24,123,000	15,751,505	8,371,495	
会誌分担金	20,593,000	11,070,000	9,523,000	分担金1,890千円+助成金9,180千円
編集補助費	500,000	252,260	247,740	
会誌発送費	800,000	845,565	-45,565	年10回(vol.49No.1-11/12)
会報印刷費	290,000	221,410	68,590	No.156-159,号外2回
会報発送費	350,000	504,350	-154,350	
大会開催費	750,000	1,213,510	-463,510	
予稿集印刷代	780,000	844,410	-64,410	
広報活動費	30,000	0	30,000	
その他	30,000	800,000	-770,000	IUGG援助金(200千円),
基金交流事業費	500,000	0	500,000	長谷川・永田賞及び大林奨励賞
基金繰入金	500,000	550,000	-50,000	繰入れ(各300千円)
予備費	100,000	0	100,000	
小計	27,863,000	19,256,660	8,606,340	
次期繰越金	1,103,092	1,051,843	51,249	
合計	28,966,092	20,308,503	8,657,589	

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成10年度本会計予算書

平成10年4月1日－平成11年3月31日

収入の部

科目	10年予算額	9年予算額	9年決算額	備考
会費収入	8,836,000	8,200,000	8,852,424	
正会員会費	6,900,000	6,648,000	6,908,200	575名×12,000円
学生会員会費	486,000	318,000	491,000	81名×6,000円
海外会員会費	150,000	234,000	153,224	
賛助会員会費	1,300,000	1,000,000	1,300,000	100%
出版助成金	9,880,000	18,739,000	9,180,000	文部省科学研究費補助金
予稿集売上代	700,000	720,000	706,200	(請求額：24,715千円)
大会参加費	410,000	410,000	418,500	
利子収入	100,000	100,000	65,046	
雑収入	100,000	100,000	389,241	
小計	20,026,000	28,269,000	19,611,411	
前期繰越金	1,051,843	697,092	697,092	
合計	21,077,843	28,966,092	20,308,503	

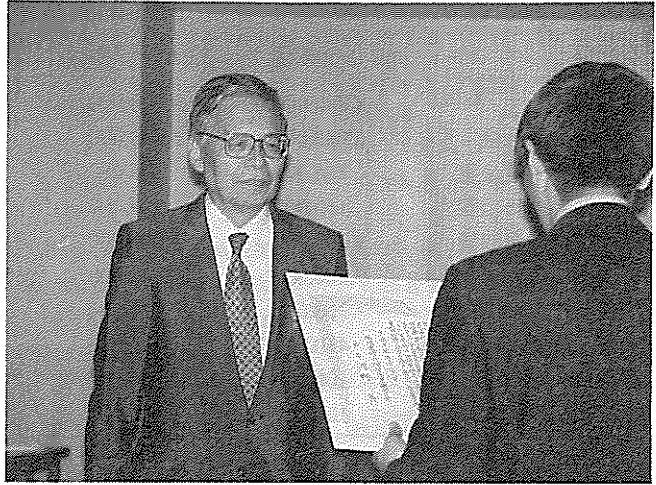
支出の部

科目	10年予算額	9年予算額	9年決算額	備考
管理費	2,150,000	2,640,000	2,955,155	
業務委託費	1,800,000	2,300,000	2,567,286	学会誌発送事務委託削除
通信費	170,000	170,000	184,007	(日本学会事務センター事務委託費)
印刷費	100,000	50,000	155,808	
旅費	50,000	90,000	850	
雑費	30,000	30,000	47,204	
事業費	16,689,300	24,123,000	15,751,505	
会誌分担金	13,099,300	20,593,000	11,070,000	分担金3,219,300円(税込)＋
編集補助費	0	500,000	252,260	出版助成金予算額9.880千円
会誌発送費	0	800,000	845,565	
会報印刷費	250,000	290,000	221,410	
会報発送費	400,000	350,000	504,350	
大会開催費	1,200,000	750,000	1,213,510	
予稿集印刷代	780,000	780,000	844,410	
広報活動費	30,000	30,000	0	
名簿作成費	700,000	0	0	1回/2年
その他	230,000	30,000	800,000	IUGG援助金200千円含む
基金交流事業費	600,000	500,000	0	
基金繰入金	500,000	500,000	550,000	
予備費	100,000	100,000	0	
小計	20,039,300	27,863,000	19,256,660	
次期繰越金	1,038,543	1,103,092	1,051,843	
合計	21,077,843	28,966,092	20,308,503	

長谷川・永田賞を受賞して

行武 毅

大変名誉ある賞を頂いて感謝しております。この賞の前身の長谷川記念杯は私達の学会独特の非常にユニークなものでした。世の中で賞という、その蔭にかく人間臭いものが付きまといがちなのですが、長谷川杯にはどこか遊び心があっただけでほほえましいところがありました。長谷川先生始め学会創立にあたられた方々のモットーは「よく学び、よく遊べ」でした。学会の講演会の終わった夜にはよく長谷川先生を囲んで前田先生、加藤先生、永田先生、関戸先生、太田先生などの大先生方が酒を酌み交わしておられたようです。今世紀の地球科学を大躍進させるきっかけとなった地球観測年



の計画もこのような雰囲気の中から生まれたのではないかと思います。ところで長谷川杯の授賞にあたっては、感謝状と杯に加えて学会会長がご自分のポケットマネーで清酒1本を添えられることがよくありました。受賞された先生は総会の後の懇親会で三つ重ねの杯を手にも会長から贈られた酒を会員の一人ひとりに注いで廻られる習わしでした、いうならば長谷川杯を酒の肴に話しがはずむという感じでした。

ところが数年前から長谷川杯は長谷川・永田賞といういかめしい賞に変身してしまいました。本来下戸である私には装いを新たにされた賞はさらに遠い別世界のものだという感じがしておりました。長谷川先生は私にとっては雲の上の存在で、温顔を遠くから拝するだけでしたが、先生が壇上で話しをされると会場全体がほのほのと明るくなるような感じをもったものです。これに対して永田先生は非常に身近な方で、廊下で擦れ違いざまにもご叱責を下されるような厳しい先生でした。記憶に残っている思い出もあります。10年以上前のことですが、常磐線の直流化の問題が再燃したことがあります。柿岡に地磁気観測所があるために常磐線の直流化が妨げられ、電車の運行本数に制約を受けるなど地元は大変な不利益を被っているということでした。背後には表に出ない複雑な事情もあったようですが、この問題を討議するために茨城県が懇談会を組織されました。気象庁、運輸省、国鉄、地元からは土浦市長その他の方がでられ、私がまとめ役を勤めることになりました。時の地磁気観測所の河村所長、後に気象庁長官になられた内田観測部長そのほか当時学会

長の平尾先生など大変苦勞されました。まとめ役を引き受けたことを永田先生にお話したところ、委員会の委員長というものはただ委員の意見を聞くだけでなく、自分自身の見解見識をもっていなければいけないという趣旨の助言を下さいました。いまでも印象に残っています。このたび長谷川・永田賞を頂くことになる、永田先生のご叱責の声がいつも身近に聞こえてくるのではないかと感じるかもしれません。

考えてみるとこの学会におよそ40年間お世話になっています。右も左もわからなかった若造をとにもかくにも研究者に仕立てて下さったのはこの学会であります。心から感謝いたします。そのうえ賞まで頂くのは恐縮です。推薦の勞をとって下さった方々、それをお認め下さった皆様にお礼申しあげます。この学会の特徴はいわゆるソリッド、アッパーから宇宙線を含む多分野の多彩な人が集まっておられて、視点が多角的なこと。これらの人々に接して、その明晰な判断と違った視野には啓発されることが多々ありました。さらによいことは、何事にも前向きに積極的で、お互いを盛り立ててやっという気風が満ちていることです。電通大での学会の帰り道たまたま川井直人先生と一緒に、先生が「他人の足を引っばるようなこととしては何事も成就しない。お互い協力してやりましょうや」といわれたのが耳に残っています。良い学会に所属したと思います。

後ろ向きの話ばかりになってしまいました。会員の皆様が学会初期の若々しい気風を受け継がれて自由奔放に活躍されることを願っています。

田中館賞を受賞して

地質調査所海洋地質部 山崎 俊嗣

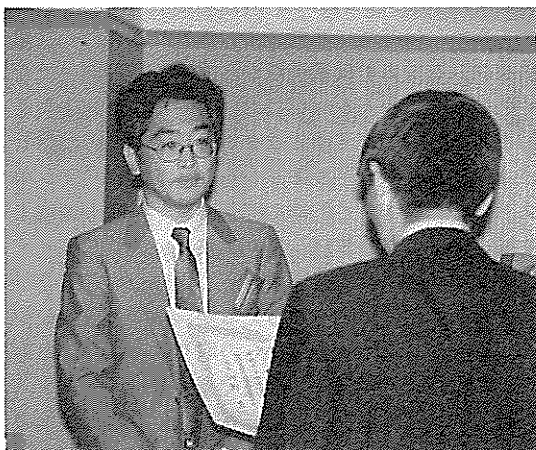
このたび田中館賞を授与いただき、たいへん有難うございました。身に余る光栄です。私にとって古地磁気・岩石磁気学との出会いは、京都大学の学部学生の時に笹嶋先生、鳥居先生に手ほどきを頂いた時であり、地質調査所に就職し海洋地質部に配属されて以来、ずっと海底堆積物を材料として研究を続けて来ました。その間、御指導、御鞭撻下さった学会の先輩、同輩の方々、私の研究を暖かく見守って下さった地質調査所の上司、海洋調査航海をとともにし、特に海底堆積物について色々教えて下さった海洋地質部の同僚に深く感謝します。

受賞につながった、古地球磁場強度変化を堆積物を用いて復元できる可能性に私が気付いたのは、1990年頃のことでした。当時は外国でもこの方面の研究は細々と続けられていましたが、「堆積物のような磁化獲得機構の物理的曖昧なものから、古地磁気強度などわかるはずがない」というのが大勢の見方であったと思います。地質調査所のプロジェクトとして80年代前半に、マンガン団塊形成の地質学的要因を研究するため中部太平洋から多数の堆積物コアが採取され、その年代決定のため残留磁気測定をしました。測定した当時は磁化方位しか気にしていませんでしたが、何かの折にデータを見直していたときに、遠く離れた場所から採取したコアの磁化強度変化のパターンが、偶然にしては似すぎていることに気がつきました。堆積物の磁化強度は、堆積当時の地磁気強度以外に、さまざまな岩石磁気的要因に支配されるのですが、マンガン団塊が形成されるような深海環境は極めて安定で、岩石磁気的に均質な粘土がゆっくりと堆積しており、系が単純であったのが幸運でした。似たようなことには皆同じ頃に気が付くようで、1992年頃からこの手の研究、つまり、精密に年代のわかった、しかも岩石磁気的に単純な堆積物を選別して相対的古地磁気強度を復元しようとする研究結果が、世界で一斉に発表されるようになりました。現在では過去百万年間程度の古地磁気強度変化の概要が明らかとなり、逆に古地磁気強度変動が第四紀堆積物の年代決定の新たな道具として注目されるようにもなっています。今後はより古い時代の地磁気強度変化を連続的に復元する努力や、より高分解能の記録を得て、気候変動をはじめ地球の他の変動との相関をさぐる研究が進むものと思います。

堆積物は古地球磁場の連続記録を保存している可能性のある唯一の材料として、これからも重要性が失われることはないだろうと思います。古地磁気強度研究以外にも、地磁気逆転過程の詳細や岩石磁気

手法を駆使した古環境・古気候の研究が、堆積物を用いて現在さかんに行われていますが、こうした研究が現在のレベルから一段上に行くためには、結局地味ではありますが、磁化獲得過程など海底堆積物表層で起きている物理・化学的プロセスの基礎的研究が重要ではないかと思っています。

私が初めて国際学会で発表したのは1989年のIAGAであり、河野先生の「IAGAに行こうキャンペーン」に触発された一人でした。そのときの印象は、「すごい！」と圧倒される研究発表がいくつもあったのはもちろんですが、「自分たちの研究も結構いい線いっているのではないかな。もう少し頑張れば世界の第一線に並べるのでは」と、たいへん励みにもなりました。以後、積極的に海外へ出かけ、世界のレベルの中で自分の研究を客観的に評価できるように努力してきました。地質調査所のような組織に属してきて測定材料には恵まれていたため、私の研究スタイルはどちらかというと「まんべんなく測ってみて、その中から面白いことを見つけよう」という、いささか戦略を欠くものでした。これからはもっと、「これを明らかにするためには、こういう堆積物の何を測定しなければならない」という態度を身につけたいと思います。ところで、省庁再編やエージェンシー化など、地質調査所のような国立研究機関をめぐる動きが急になっています。大学と役割分担を図りながらも、地質調査所でも引き続き古地磁気学のような基礎的研究を続けていけるよう、また、私たちの実験設備を他機関の方々にも利用していただけるよう垣根をできる限り低くすることなど、広い意味での当分野の学問の発展にも微力ながら努力していきたいと思っています。今後とも宜しく御指導のほどお願いします。



田中館賞を受賞して

宇宙科学研究所 星野 真弘

田中館賞を頂きましてどうも有り難うございます。多くの諸先生のご指導や研究者仲間との貴重な議論などに恵まれ、これまで研究できたことに深く感謝しております。ここ数年、衛星観測のデータ解析も自分自身でやってみる機会に恵まれ、またスーパーコンピュータの進歩により数値シミュレーションも本格的なものが徐々に来るようになり、データ解析と理論・シミュレーションの考察を併せた研究が、うまく融合するようになってきたと実感しています。私自身の中でも磁気圏物理の現象が「見える」ようになってきて、その面白さを楽しんでいます。

例えば、磁気リコネクションの問題では、GEOTAIL衛星観測と数値シミュレーションを用いることによって、巨視的構造とそのミクロな過程を、「まるごと」理解できるようになってきており、これが最近の成果だと思っています。特に、イオンの速度分布関数が、GEOTAIL観測においても熱的Maxwell分布からかなり外れているだけでなく、複雑なジャイロ運動を現した速度分布関数が、磁気リコネクションに伴って巨視的スケールでも形成されている事が分かってきました。これは従来の電磁流体的な磁気リコネクション描像に対して、運動学的な描像で巨視的磁気リコネクションの構造を理解することが可能になってきたと言ってよいかと思えます。

しかし、現在の衛星観測で「手に取るように」速度分布関数が議論出来るのは主にイオンの振る舞いに限られ、電子は未だ時間分解能が不足し残念ながら大体熱的分布に近いものしか見えません。ところが、この未だ見えていない電子の振る舞いが、少なくとも磁気リコネクションの磁場拡散の物理を理解するためには非常に重要です。それは最終的に「磁場凍結」を破るのは電子だからです。観測だけでなく数値シミュレーションにおいても、かなり工夫をしないと電子のダイナミクスを理解するのは難しく、特に3次元粒子シミュレーションで、イオンのスケールだけでなく同時に電子のスケールも精度よく扱う本格的な計算は、まだ出来ていません。イオンのダイナミクスの理解を下に、いかにして電子の本質的な振る舞いを捕らえるか、観測と理論・シミュレーションの両側面からの取り組みが今後とも続くでしょう。将来衛星観測で電子ダイナミクスを観るのは可能になりつつあり、磁気圏物理現象の理解はどんどん深まり、実証的科学としての面白さ



が更に活発に展開されるものと信じています。

さてここで取り上げた例のように、私自身の研究テーマのなかでも新しい展望が見えてきた反面、磁気圏物理学に対する「悩み」も抱いています。昨今物理学全体が伸び悩んでいるといわれますが、磁気圏物理学もかなり難しい時期に来ているのではと思ったりすることがあります。線形理論や準線形理論などの枠組みでは表現できない複雑な系での振る舞いが磁気圏物理での現象の本質であったり、また現象を細分化して更にミクロな現象を追求してみても、現象自体は簡略化されず、系の複雑性は一向に変わらないように思われるからです。最近はこのような複雑な系の中から、一定の法則を見出す「複雑性科学」の研究も発展しておりますが、これまでの範囲では未だ物理として本質が何であったのか明確ではないと思います。一体磁気圏物理とは何であるか分からない事があります。

磁気圏物理の将来の展望に関して、次のような考えを持っています。このまま単に磁気圏物理だけの問題を掘り下げていくだけでなく、広く宇宙プラズマでの諸現象を論じ、そのなかでの現象の類似性や相違性を研究する事により、磁気圏物理現象の理解も深まるのだろうと考えます。例えば、磁気リコネ

クシヨンの関連で言えば、これは地球磁気圏だけでなく、「ようこう」衛星の太陽コロナ画像で見られるように、太陽物理と共通な物理で研究出来るところが数多くある事が分かってきました。もちろん、このようなことは、かなり昔から認識されていたと思いますが、昨今は「ようこう」や「GEOTAIL」の観測データに基づいて、現象やそこに潜む物理の類似性や相違性が実証できるようになってきたのが、重要な点です。

衝撃波加速においても、超新星残骸での衝撃波による超高エネルギー粒子加速の問題と太陽圏で見られる衝撃波の物理はほとんど同じで、共通の言葉で議論でき、観測事実もいくつも積み重ねられてきています。またこのような明らかに共通点があると思

われる物理だけではなく、もっと広くプラズマ物性を広大な宇宙現象のなかで議論すれば、これまで以上に自然現象の理解が深まるのは言うまでもありません。地球物理の研究者が興味を持てる（広義の）宇宙物理現象が沢山あり、同じ土俵で議論されるべきであると考えていますが、皆さんはいかが思われますか。磁気圏物理の大問題である磁気圏の成因やプラズマシートのイオンと電子の熱エネルギー配分の過程などを、宇宙物理学として捉えた見方をするだけで、楽しくなってくるのではないのでしょうか。このような観点で微力ながらも磁気圏物理の発展に寄与できたらと思っております。今後とも皆様のご支援・ご指導をお願いいたします。

IUGG2003 準備委員会報告

- IUGG2003準備委員会は日本学術会議地球物理研連のもとに結成され、これまでに4回開催(97.2.24~98.4.17)された。委員長は上田誠也、事務局は東大海洋研。開催正式決定までを担当する。
- IUGG2003は、日本が札幌市を開催地として99年夏の22回IUGG(英国)で提案する(地球物理研連了解)。正式決定すれば、学術会議のもとに組織委員会を結成する。
- IUGGは5000人規模の大会で、きちんとした効率的な体制が必要。札幌コンベンションビューローのバックアップは8人体制で、札幌市、北海道も協力的である。
- IUGGは、登録料でまかなうのが基本。開催経費は、すべて含んで約2億円規模と見込まれる。仮に4000人参加なら1人5万円となる。
- IUGG開催にもっとも重要なのは事務局(人とスペース)。日本は最低これをしっかりやる必要あり。プロを雇い、電子化、省力化で効率的にやる。
- IUGGの中身にもっとも重要なのはプログラム委員会(IUGGと各Assoc.代表+事務局+幹事)。2000年の終わりには結成して、活動方針とスケジュールを決める。
- 準備委員会の活動の広報活動を強化する。
- 開催地からのサポートは、サイエンスプログラム以外の現地行事全般について期待できる。実務は札幌コンベンションビューローが担当する。

(三宅委員)

地球惑星科学関連学会連絡会報告

1998年5月28日の合同大会期間中に開催された第15回地球惑星科学関連学会連絡会で以下のことが決まった。

- (1) 2000WPGMを連絡会としてはプロポーズする。
期間：2000年6月27日~30日
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
窓口：連絡会事務局(本蔵事務局長)
但し、2000年合同大会と連携して開催する。合同大会の日程は2000年6月26日~29日、場所は国立オリンピック記念青少年総合センター。
合同大会のLOCは現在、打診中。
- (2) 2000WPGNの政策担当の組織委員会を設立し、連絡会が実務担当とする。組織委員会の委員は各学会の会長にお願いする。第1回の組織委員会は1999合同大会期間中に代々木で行う予定。
- (3) 各連絡委員は各学会に持ち帰り、2000WPGMの共催と会長が組織委員になるかどうかを確認し、連絡会に報告する。

*上記(3)に対して、運営委員会は持ち回り会議を行い、2000WPGMの共催学会になる事を6月11日付けて承認し、連絡会にその旨を報告した。
(湯元委員)

第104回総会並びに講演会開催のお知らせ

第104回地球電磁気・地球惑星圏学会総会と講演会は、茨城大学理学部の担当により、下記の通り開催されます。

期間：1998年11月10日（火）～13日（金）
 主会場：茨城県青少年会館 水戸市緑町1-1-18
 TEL:029-226-1388, 029-226-1445
 FAX:029-226-1388

副会場：茨城県立歴史館講堂（ポスター会場）

懇親会場：ときわ会館

（注：副会場、懇親会場は、主会場からすぐ近くにあります。地図参照）

日程（暫定）：

- 11月10日（火）一般講演、ポスター発表
- 11月11日（水）一般講演、ポスター発表
- 11月12日（木）一般講演、総会、特別講演、懇親会
- 11月13日（金）一般講演、ポスター発表

問い合わせ先：茨城大学理学部 渡辺 堯

watanabe@env.sci.ibaraki.ac.jp

電話 029-228-8399

FAX 029-228-8405

総会、講演会交通案内

＜JR常磐線利用＞

水戸駅改札を出て右に行き、左の階段を下りるとバス乗り場に出る。5番乗り場より「茨城交通バス」新原茨大行、河和田団地行、双葉台団地行に乗車。「大工町3丁目」下車。徒歩5分。

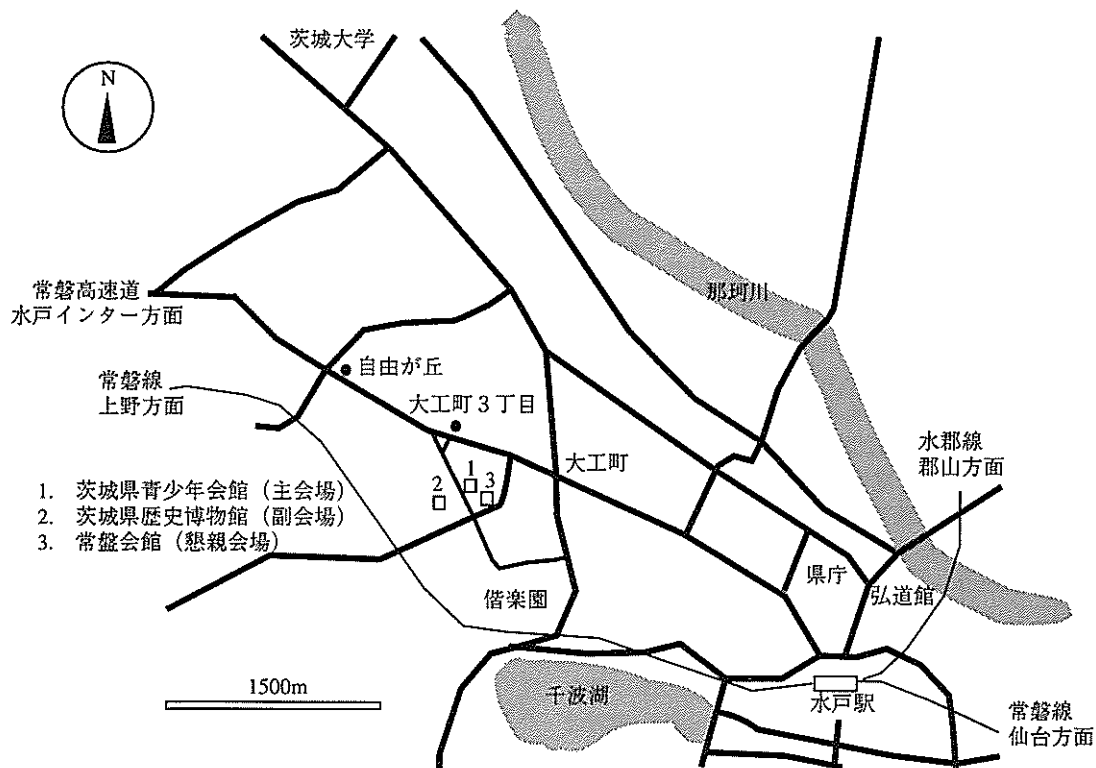
（上記以外の5番乗り場発のバスも、全て「大工町3丁目」を通るようですが、一応確認して下さい）

＜常磐高速バス利用＞

東京駅八重洲南口長距離バス乗り場より、水戸駅行乗車（3番乗り場）。乗車券（2080円）を買ってから乗車のこと。満員になれば臨時バスが出る。所要約2時間で「自由が丘」下車。市内バス「水戸駅行」に乗り換え「大工町3丁目下車」。

＜常磐高速道路利用＞

水戸インターチェンジより水戸市内方面へ。国道50号を「水戸市内」方向へ左寄り走行（右寄り高架橋の大洗・日立方面への国道50号バイパスに入ると、水戸市の遙か南を通過してしまいます）。インターより約15分後、「偕楽園」、「歴史館」方面への道標のある信号を右折。会場の駐車場に70-80台収容可能。



宿泊案内 (御申込みは各自直接行って下さい。)

学会会場の茨城県青少年会館には、ユースホステルが併設されています。相部屋もしくは大部屋ではありませんが、格安にて御利用できます。特に学生参加者の方々にお薦め。先着順。詳細は以下の通りです(使用料は1名1泊分)。

部屋の種類(定員)	使用料(25歳未満)	使用料(一般)
洋室(2名) 2部屋	1020円	2040円
和室(6名) 7部屋	820円	1530円
和室(15名) 1部屋	410円	820円

*宿泊申し込みは、直接下記までお願いします。(学会参加者であることを伝えて下さい。)

〒310・水戸市緑町1-1-18 偕楽園ユースホステル 電話029-226-1445 FAX 029-226-1388

<水戸市内の共済関係宿泊施設>

- ・サンレイク水戸(公) 029-224-2727 水戸市梅香1-6-8 水戸駅よりバス茨大行南町2丁目下車徒歩7分
風光明媚。千波湖を見おろす常磐線沿い。
- ・ときわ会館(警) 029-225-4816 水戸市元山町1-7-16 学会の会場のすぐそば。懇親会の会場はここ。

<水戸市内のホテル、ビジネスホテル、旅館>

※料金等は変更されている可能性があります。また、下に行くほど会場に近くなります。

地区	ホテル名	電話(029-)	料金(百円)	宿泊人数	備考
水戸駅南口 周辺	水戸ステーションホテル	231-3151	62~	116	駅前
	駅南第一ホテル	233-2511	62~	100	駅前
	水戸プリンスホテル	227-4111	63~	202	駅より徒歩3分
	水戸プリモホテル	231-6999	58~	68	駅より徒歩3分
	ホテルシーズン	227-0008	67~	114	駅より徒歩5分
水戸駅北口 周辺	水戸オリエンタルホテル	233-3111	60~	240	駅より徒歩5分
	三の丸ホテル	221-3011	75~	86	駅前
	ビジネスホテルかもした	231-3900	65~	80	駅前
	つるやホテル	225-1756	43~	23	駅より徒歩2分
	水戸京成ホテル	226-3111	90~	90~100	駅より徒歩3分
	ホテル香取屋	221-4426	53~	39	駅より徒歩3分
	水戸シルバーイン	225-0011	62~	75	駅より徒歩3分
	みまつホテル	224-3005	62~	125	駅より徒歩4分
	ビジネスホテルまこと	227-2711	55	36	駅より徒歩5分
	ホテルメッツ水戸	222-3100	72~	130	駅構内!(茨城大特割)
バス通り沿い	ホテルステノ	225-8811	59~	90	駅より徒歩7分
	ホテル亀屋	227-2611	2食付110~	30	ステノ隣
	グリーンホテル水戸	227-6171	55~	80	駅より徒歩10分
	水戸ハイアットホテル	231-8110	62~	56	駅より徒歩10分
	アーバンビジネスホテル	221-3360	52~,P無料	50	ハイアット斜め向かい
	中央ホテル	221-3101	52~	35	駅より徒歩12分
	水戸第一ホテル本館	221-8855	S39~	50	駅より徒歩12分
	ホテルサトー水戸	228-2811	62~	137	駅より徒歩15分
	旅館いづみ荘	221-3504	48~	50	駅より徒歩15分
	菊屋ホテル	224-2417	朝食付70~	120	駅より徒歩17分
	ホテルいづみ屋	231-2295	52~	40~80	大工町下車徒歩3分
	山口楼本店	231-1231	130~	30	大工町下車徒歩3分
	ホテルニュー清香	221-3221	45~	60	大工町三下車徒歩2分

講演申し込みについて

【講演申込および予稿原稿送り先】

★地球内部および月・固体惑星関係

〒113-0032 東京都文京区弥生1-1-1
東京大学地震研究所 笹井 洋一 宛

★超高層（太陽・惑星間空間、地球・惑星電磁気圏 および地球・惑星大気）関係

〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄
京都大学超高層電波研究センター 津田 敏隆 宛

【投稿の方法（郵送）】

- 15ページの講演申込用紙をコピーしたものに必要事項を記入して、予稿原稿とともにお送りください。
- 申込用紙、予稿原稿ともにコピーを同封して下さい。コピーを同封していないものは受け付けません。
- (a)講演申込用紙の氏名、所属はプログラム編集・印刷の都合上、日本語表記が可能な場合は必ず日本語でお願い致します。
- (b)講演題目は、予稿と同じ言語でお願いします。
- (c)外国人の氏名はアルファベット表記でも差し支えありませんが、所属はできるだけ日本語で表示して下さい。
- (d)日本人著者名の場合は、漢字とアルファベットの両方の欄に記入されていること。
- (e)英語講演題目は、文頭、固有名詞、略号以外は小文字とすること。
- 予稿原稿のフォーマットに注意願います。特に左上の10mm×35mmのスペースは予稿集の印刷時に講演番号を付けるためのものですので、この部分にはタイトル等が入らないようにして下さい。
- 講演申込みは筆頭著者一名につき、口頭発表一件、ポスター発表一件まで受け付けます。（但し、プログラム編成の都合上、実際の発表が希望通りにはならない事がありますので予めご了承下さい。）又、非会員のみによる発表は受け付けられません。
- 講演・ポスター発表の際にビデオ(VHS)、パソコンもしくは映写機(8mm)を使われる方は、その旨、プログラム申込用紙にご記入下さい。
- 今回の大会から春の合同大会と同じく、「学術情報センターへの登録用データ原稿」も予稿とあわせて郵送して頂きます。原稿見本をご覧ください。

学術センターへの登録原稿は下記各項目を記入して、予稿原稿と一緒に郵送下さい。

- 各項目の先頭にはA1;.....T1:の記号を書き込んで下さい。
- A1: 日本語タイトル（英語タイトルのみの場合は無くてよい）
 - B1: 英語タイトル（大文字は基本的に、タイトル先頭のみ）
 - C1: 使用言語
（講演に際し使用する言語。日本語または英語）

E-G: 著者（E. 漢字、F. カタカナ、G. ローマ字）

姓名の間は/で区切る。ローマ字名も姓名の順。著者順に従い、E1-L1、E2-L2、E3-L3、と番号をふる。外国人の場合は、E*は不要、またグループの場合はJ-Lも省略可。

J-L: 所属機関（J. 漢字、K. カタカナ、L. 英文）

学術情報センターの規約により、所属機関は論文発表時のものとし、元、現などはつけないで下さい。また機関名は省略しないで下さい。東工大ではなく東京工業大学。ただし株式会社や財団法人などは入れない；株式会社日立製作所ではなく日立製作所。NHKなど略称が広く知られている場合は略称でも可）。

M. 日本語キーワードを6個以内で記入。

N. 英語キーワードを6個以内で記入。

D1. 日本語抄録を300字前後で記入。

T1. 英文抄録を100語前後で記入。

日本語抄録、英文抄録は予稿本文を整理する形で書いて下さい。A4用紙に印刷したオリジナル原稿とそのコピーを郵送下さい。原稿は一頁に収めて下さい。収まらない場合には2頁をホッチキスで綴じて下さい。また、平テキスト形式のファイルを“著者名.gak”という名前で予稿原稿と同じフロッピー・ディスクに書き郵送して下さい。

【電子メール・WWWによる投稿の方法】

- 従来までの郵送による方法に加え、電子メール、WWWを利用した投稿の受付を開始します。但し、電子メール、WWW共に予稿集には図の添付ができませんので、予稿集にどうしても図を載せたい方は従来通りの郵送による申込み方法をご利用下さい。電子メール、WWWを利用なさる方へはオンラインの予稿集から各自のホームページにある図へのリンクを張るサービスを行います。電子メール、WWWを利用した投稿方法等についての詳しい情報は URL <http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/sgepss/toko.html> を参照して下さい。（8月初めからサービス開始予定。）
- 今回の大会から春の合同大会と同じく、「学術情報センターへの登録用データ原稿」も、予稿とあわせて入力して頂きます。WEB投稿の手順に従って入力してください。

【締め切り】

- 予稿原稿の申込み締め切りは、郵送による場合には8月31日（月）夕方5時、電子メール、WWW利用の場合には9月1日（火）午前0時と致します。FAX、電話等による遅延の依頼は一切受け付けられません。
- 総会議題の申込は、8月31日（月）迄に会長宛書面をお願いします。

講演申し込み用紙 (コピーしてお使いください)

1. 題目 (予稿原稿と同じ言語にて記入) :

2. 氏名 (所属) (日本語にて記入、連名の場合スピーカーには○を付ける) :

連絡先氏名 : _____

Tel: _____ Fax: _____ e-mail: _____

3. 投稿区分 (○をして下さい。複数選択可、最低1つは必須)

- A 地球内部 : 1. 主磁場ダイナモ 2. 電気伝導度 3. 地殻活動電磁気学 4. 磁気異常
5. 岩石磁気・古地磁気 6. 磁場計測 7. その他 ()
- B 固体惑星 : 1. 太陽系 2. 月・隕石 3. 比較惑星 4. その他 ()
- C 超 高 層 : 1. 大気圏 2. 電離圏 3. 電磁圏 4. 磁気圏 5. 太陽圏 6. 惑星圏
7. 機器開発 8. その他 ()

4. 発表形式 : 1. 口頭 2. ポスター 3. どちらでも可

(必ずしもご希望に添えないことがあります)

5. 映像装置 : 1. ビデオ装置を使用する (VHS標準フォーマットのみ)

6. 発表順位 : 以下の講演の (前/後) を希望します。

著者 : _____

題目 : _____

7. 予稿原稿は次ページのフォーマットに従って、A4用紙にできるだけワープロで清書して下さい。

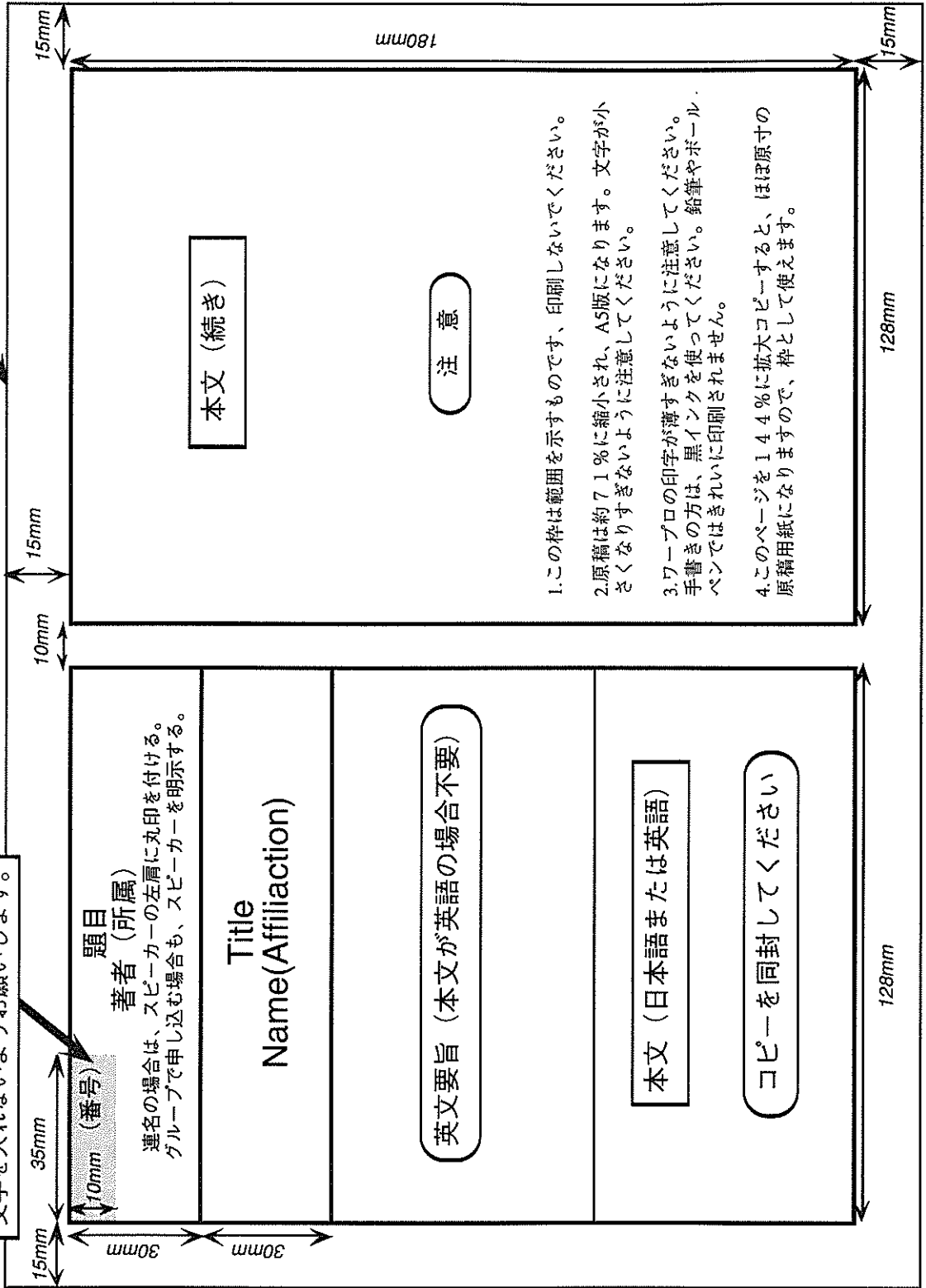
8. 予稿原稿のコピーを必ず1枚同封してください。

9. その他ご希望、ご意見などがありましたら以下にお願いいたします。

予稿原稿フォーマット

A4用紙の外枠

この欄には講演番号が入りません。
文字を入れないようお願いいたします。



1. この枠は範囲を示すものです、印刷しないでください。
2. 原稿は約71%に縮小され、A5版になります。文字が小さくなりすぎないように注意してください。
3. ワープロの印字が薄すぎないように注意してください。手書きの方は、黒インクを使ってください。鉛筆やボールペンではきれいに印刷されません。
4. このページを144%に拡大コピーすると、ほぼ原寸の原稿用紙になりますので、枠として使えます。

人事公募

●宇宙科学研究所（2件）

このたび、下記の要領により教官公募（2件）を行いますので、広く適任者の推薦、応募を求めます。

【1】

1. 募集人員 助手 1名
2. (1)所属部門：太陽系プラズマ研究系
磁気圏プラズマ物理学部門
(2)勤務地：神奈川県相模原市由野台3-1-1
宇宙科学研究所
3. 専門分野と職務内容：地球および惑星の磁気圏・超高層大気の研究。当研究系では、これまで進めてきた地球電磁気圏・超高層大気の研究を基礎に、他の太陽系天体周辺の環境の理解へと研究対象を拡大しようとしている。多様な姿を示している太陽系天体の大気・プラズマの構造・運動を太陽風との相互作用という切り口から統一的に理解することが当面の目標である。関連分野の研究者とも協力しながらこの目標達成に向かって積極的に取り組んでいただける方を希望する。なお、太陽系プラズマ研究系には、現在、向井利典教授、早川基助教授、斉藤義文助教授が在籍している。大学共同利用機関である本研究所の役割を理解し、共同利用諸計画の遂行に積極的な役割を果たしていただく必要があります。
4. 着任時期：決定後できるだけ早い着任を希望。
5. 提出書類：(1)略歴、(2)研究歴、(3)論文リスト及び主要論文別刷り、(4)研究計画書、(5)他薦の場合／推薦書2通。自薦の場合／本人について意見を述べられる人2名の氏名と連絡先。
6. 応募締切 1998年7月31日（金）必着
- 7.

(1)提出先：

〒229 神奈川県相模原市由野台3-1-1
宇宙科学研究所 庶務課人事係
電話（代表）0427-51-3911

(2)問い合わせ先：

太陽系プラズマ研究系 鶴田浩一郎 内線2501
FAX 0427-59-4236
メール tsurada@stp.isas.ac.jp

8. その他：封筒の表に、「太陽系プラズマ研究系助手応募（推薦）書類在中」と朱書してください。選考は、宇宙科学研究所運営協議会において行います。応募者に適格者がいない場合は決定を保留することがあります。

【2】

1. 募集人員：助手 1名
2. 所属部門：宇宙科学企画情報解析センター
3. 専門分野と職務内容：太陽物理学、天体プラズマ物理学。太陽観測衛星「ようこう」のサイエンスデータベースの構築を進めるとともに、次期太陽観測衛星「SOLAR-B」計画において積極的な役割を果たせる方。また、大学共同利用機関である本研究所の職務を理解し、共同利用諸計画の遂行に積極的な役割を果たしていただける方を希望する。なお、宇宙科学企画情報解析センターは本研究所の計算機、ネットワーク、科学衛星データベース関連の研究および運用業務を遂行しています。
4. 着任時期：決定後、なるべく早い時期に着任されることを希望します。
5. 応募資格：修士課程修了または同等以上の研究能力を有する者。
6. 提出書類：(1)略歴、(2)研究歴、(3)論文リスト、および主要論文別刷、(4)研究計画書、(5)他薦の場合／推薦書2通。自薦の場合／本人について意見を述べられる方2名の氏名及び連絡先。
7. 公募締切：平成10年7月31日（金）必着
8. 宛先：宇宙科学研究所 庶務課人事係
〒229-8510 神奈川県相模原市由野台3-1-1
電話（代表）0427-51-3911
9. 問い合わせ先：宇宙科学企画情報解析センターセンター長 向井 利典 内線2510
10. その他：選考は宇宙科学研究所運営協議会において行います。応募者に適任者がいない場合、決定を保留することがあります。封筒の表に「助手応募（推薦）書類在中」と朱書きして下さい。

●名古屋大学太陽地球環境研究所（2件）

【1】

1. 公募人員：助教授 1名
2. 所属部門：電磁気圏環境部門（愛知県豊川市）
3. 研究分野：熱圏・電離圏・磁気圏物理学
現在、当研究部門では、欧州非干渉散乱（EISCAT）レーダー等の大型レーダーと大気光イメージング装置等を用いた地上観測、人工衛星利用等の手法により熱圏・電離圏・磁気圏環境の研究を行っています。今回の公募では、光学的・電

波的観測手法を用いてこれらの研究を広く発展させるとともに、当該研究分野において先導的な役割を果たしていただける方で、かつ理学系または工学系大学院等の教育にも熱意をもち、全国共同利用研究所としての任務を十分に理解し、共同利用の促進に積極的に取り組んでいただける方を希望します。

4. 着任時期：決定後できるだけ早い時期。
5. 提出書類：履歴書、研究歴、業績リスト、主要論文別刷、研究計画書。自薦の場合は、本人についての意見を述べられる方2名の氏名と連絡先、他薦の場合は、2名の推薦書。
6. 公募締切：平成10年9月25日（金）
7. 書類送付先、問い合わせ先

(1)書類送付先

〒442-8507 愛知県豊川市穂ノ原3-13
名古屋大学太陽地球環境研究所
所長 國分 征
Tel: 0533-89-5182 Fax: 0533-84-8806

(2)問い合わせ先

同研究所 小川忠彦 Tel: 0533-89-5164

8. その他：

封書に「助教応募書類在中」と朱筆し、書留で送付のこと。

[選考方法]名古屋大学太陽地球環境研究所人事選考委員会の選考に基づき同運営協議会の意見を求めて同教授会で決定します。なお、該当者がいない場合は決定を保留します。

【2】

1. 公募人員：助手 1名
2. 所属部門：総合解析部門（愛知県豊川市）
3. 研究分野：太陽地球系データの総合解析、モデリング/シミュレーションにより、領域間相互作用の研究。とくに、太陽風/磁気圏/電離圏過程の研究。全国共同利用研究所としての当研究所の任務を十分に理解し、当該部門の研究に積極的な役割を果たす方を希望します。
4. 着任時期：平成10年度のできるだけ早い時期。
5. 応募資格：大学院修士課程修了または同等以上。
6. 提出書類：履歴書、研究歴、業績リスト、主要論文別刷、研究計画書；自薦の場合は本人について意見を述べられる方2人の氏名と連絡先、他薦の場合は2人からの推薦書。
7. 公募締切：平成10年9月25日（金）
8. その他：封書に「助手募書類在中」と朱筆し、書留で送付のこと。名古屋大学太陽地球環境研究

所人事選考委員会の選考に基づき、同運営協議会の意見を求めて同教授会で決定します。なお、該当者がいない場合は決定を保留にします。

9. 宛先：

〒442-8507 愛知県豊川市穂ノ原3-13
名古屋大学太陽地球環境研究所
所長 國分 征
Tel: 0533-89-5182 Fax: 0533-84-8806

10. 問い合わせ先：

〒442-8507 愛知県豊川市穂ノ原3-13
名古屋大学太陽地球環境研究所
部門主任 上出洋介
Tel: 0533-89-5183 Fax: 0533-89-0409

●東京大学理学系研究科地球惑星物理学専攻

1. 職種：教授あるいは助手
2. 人数：1あるいは2名
3. 分野：惑星科学
4. 着任：できるだけ早い時期
5. 提出書類：(1)履歴書、(2)これまでの研究概要(A4・2枚以内)、(3)業績リスト、(4)主要論文別刷3編、(5)研究計画書(A4・2枚以下)、(6)他薦の場合は推薦状、自薦の場合は意見を聞ける人2名の連絡先、(7)応募対象の職名
6. 〆切：9月16日
7. 問い合わせ先：〒113-0033 文京区本郷7-3-1
東京大学理学系研究科地球惑星物理学専攻
杉浦 直治
tel 03-3812-2111 内4307 fax 03-3818-3247
sugiura@geoph.s.u-tokyo.ac.jp
8. 提出：応募書類在中と朱書のうえ、書留で郵送のこと。

研究助成・賞案内

(いずれも詳細については、学会総務までお問い合わせ下さい)

●東レ科学技術賞

対象：学術上の顕著な業績・重要な発見・発明、
技術上の重要問題解決など

賞：賞状、金メダル、賞金500万円、2件

推薦数：本学会より2件

メ 切：総務受付9月9日

贈 呈：来年3月

連絡先：(財)東レ科学振興会

〒279-8555 浦安市美浜1-8-1

tel 047-350-6103 fax 047-350-6082

●東レ科学技術研究助成

対象：独創的・萌芽的研究を行なっている若手
研究者

助成金：一件3千万円以下10件、総額1億3千万円

推薦数：本学会より2件

メ 切：総務受付9月9日

選 考：一次書類選考、二次面接

贈 呈：来年3月

連絡先：東レ科学技術賞に同じ

●日本証券研究調査助成

対象者：学術文化の研究調査に従事する55才以下
の個人またはグループ

分 野：社会科学および自然科学

(新素材・環境改善の萌芽的研究)

助成金：一件100万円以下、総額6千万円

推 薦：所属機関長および同じ専門の学者のものが
必要

メ 切：直接8月20日

決 定：今年11月

連絡先：(財)日本証券奨学財団

〒103-0025 中央区日本橋茅場町1-5-8

東京証券会館6F tel 03-3664-7113

●日産科学賞

対象者：自然科学分野において重要な発見、新分野
の開拓に貢献した50才未満(今年度末時点)
の公的機関所属の研究者

推薦数：本学会より1件

賞：賞状、メダル、奨励金500万円、2件

メ 切：総務受付7月31日

贈 呈：来年3月

連絡先：(財)日産科学振興財団

〒104-0061 中央区銀座6-17-2

tel 03-3543-5597 fax 03-3543-5598

URL www.t3.rim.or.jp/at02-nsj

●日産学術研究助成

課 題：人間－自然環境系、人間－人工環境系に関
する研究(総合研究・海外共同研究)

地球表層環境に関する基礎研究ほか(一般研
究・奨励研究)

期 間：2-3年(総合研究・海外共同研究・一般研究)
1年(奨励研究)

資 格：学術研究機関に所属する常勤研究者

年齢制限なし(総合研究・海外共同研究)

45才以下(一般研究)

35才以下(奨励研究)

助成額：1千万円以下5件(総合研究)

500万円以下5件(海外共同研究)

1千万円以下10件(一般研究)

200万円以下25件(奨励研究)

総額2億円

推 薦：学会推薦不要(総合研究・海外共同研究)

本学会より2件(一般研究)

本学会が全件推薦(奨励研究)

メ 切：直接8月31日(総合研究・海外共同研究)

総務受付7月31日(一般研究・奨励研究)

決 定：来年2月

連絡先：日産科学賞に同じ

SGEPSS Calendar

1998年

7月7日～10日 International SuperDARN Workshop 於 東京・代々木

7月11日～19日 第32回宇宙空間科学COSPAR総会(本会共同主催) 於 名古屋国際会議場

7月21日～24日 1998 Western Pacific Geophysics Meeting in Taipei, Taiwan

7月30日～31日 極域における電離圏磁気圏総合観測シンポジウム 於 国立極地研究所

10月28日～30日 第42回宇宙科学技術連合講演会(本会共催) 於 航空宇宙技術研究所

11月10日～13日 地球電磁気・地球惑星圏学会第104回総会・講演会

会場：茨城県立青少年会館他（水戸市）。担当：茨城大学理学部

1999年

5月17日～21日 1999年環境電磁工学国際シンポジウム(本会協賛) 於 中央大学駿河台記念館

6月8日～11日 地球惑星科学関連学会1999年合同大会 於 国立オリンピック記念青少年総合センター

SGEPSSカレンダーは会員からのお知らせで成り立っております。国内外の学会、研究会、委員会、予稿締切等、皆様に広めるべきことがございましたら会報担当までお知らせください。

地球電磁気・地球惑星圏学会

会長 河野 長

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学 理学部 地球惑星物理学科

TEL:03-3812-2111,ex.4310 FAX:03-3818-3247 e-mail: kono@geoph.s.u-tokyo.ac.jp

総務 岩上 直幹

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学 理学系研究科 地球惑星物理専攻（1号館）

TEL:03-3812-2111,ex.4590 FAX:03-3818-0745 e-mail: iwagami@sunep.grl.s.u-tokyo.ac.jp

庶務 渡辺 堯（会報担当）

〒310 茨城県水戸市文京 2-1-1 茨城大学 理学部 地球生命環境科学科

TEL:029-228-8399 FAX:029-228-8405 e-mail:watanabe@env.sci.ibaraki.ac.jp

運営委員会 〒113東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21 (財)日本学会事務センター 気付付

03-5814-5810 会員業務（入退会、住所変更等、会費、会誌）

03-5814-5801 学会業務（庶務、窓口、渉外）

03-5814-5820 ファクシミリ

入会申し込みは運営委員会宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。
会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿をお待ちしています。